

新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達

およびメンタルヘルスとの関連 (4)

高澤 健司⁽¹⁾・播磨 俊子⁽²⁾

Study on relation of student well-being with career development and mental health in brand-new university (4)

TAKASAWA Kenji⁽¹⁾ and HARIMA Toshiko⁽²⁾

This questionnaire study investigated well-being among seniors at a brand-new university. There were both positively influenced and negatively influenced groups of students. The positively influenced group of students was 21% and the negatively group was 38%. They were analyzed in terms of relation between the influence and, ego identity, subjective adjustment and daily life skill using analysis of variance (ANOVA). The results showed that positive image seniors had higher scores at self identity, existence of task and purpose, and information summation. And positively influenced group has kept high scores at identity and daily life skill from freshman to senior. It is suggested that existence of model is important for negatively influenced group.

Keywords : brand-new university, seniors, campus life, career development, mental health

問題と目的

本研究は、新設大学であることがもつ学生に対する影響を、大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と、キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討することを目的とし、新設1年目の入学生(1期生)を1年生時から縦断的に継続調査してきた最終学年時(4年生時)での調査研究であり、「新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連」(高澤・播磨, 2013)と「同(2)」(高澤・播磨, 2014), 「同(3)」(高澤・播磨, 2015)に続く、第4報である。

まず高澤・播磨(2013)では新設大学の開設1年目の入学生(1期生)を対象に、先輩というモデルがない状況での学業や大学生活の充実感についての意識と、メンタルヘルスの問題、キャリアに関する意識や

行動の発達との関連について検討した。その結果、新設大学であることが大学生活の充実感に影響があると感じる学生の中にも、プラスと感じる学生とマイナスと感じる学生の両方がおり、全体としてはプラスと感じる学生は、影響がないと感じたり影響をマイナスと感じる学生に比較してよりポジティブな特徴を持っていることが明らかになった。しかしマイナスの場合にも否定的な意味だけではなく自己探索的な面でポジティブな意味があることが示唆された。

次に開設2年目の調査を行った高澤・播磨(2014)では、新設大学であることが大学生活の充実感にマイナスの影響を与えると考える学生の比率が増加した。そして、充実感にプラスの影響を感じる学生には、キャリア発達やメンタルヘルスの各尺度においてポジティブな傾向が、マイナスの影響と感じる学生にはネガ

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

⁽²⁾ 福山市立大学名誉教授・神戸大学名誉教授

ティブな傾向が示され、マイナスと感じる学生への支援が課題となることが示された。同時に2期生にも同様の調査を実施し、1期生と2期生との比較検討をした結果は、学生生活への積極性に関する面で、1期生が2期生よりもポジティブな傾向が強いことが明らかになった。

そして開設3年目での高澤・播磨(2015)では、3年生となった1期生の現状と1年生時からの経年的変化を検討するとともに、2期生、3期生にも同様の調査を実施し、新設3年目における各期生の特徴の比較検討を行った。その結果、入学年度が下がるにしたがって新設大学であることが学生生活に影響を及ぼすと考える学生の割合が下がっていること、キャリア発達やメンタルヘルスの各尺度得点の各期生間の比較で、新設3年目では1期生が全ての尺度のいくつかの因子において他の2期生、3期生より有意に高い得点を示し、ポジティブな傾向が高いことが示された。しかし各期生の1年生時の得点を比較した結果では1期生と他期生との差はみられず、入学年度による学生の状況に大きな差は認められなかった。したがって3年目における1期生(3年生)と他の期生(2・1年生)との差は、入学後の学年進行によってもたらされた変化、あるいは就職・卒論が具体的に意識されてきたことによる影響を反映していることが推測された。しかしこの点は1期生に固有の特徴かもしれず、この点は2期生が3年生になった時にも同様な変化が見られるかどうかを踏まえて再度考察することが課題であるとされた。

また、1期生の経年的変化については、新設大学であることにマイナスの影響を感じる割合が2年生時・3年生時で増えていること、またプラスの影響を感じている学生は一貫してキャリア発達やメンタルヘルスの面で他の群よりポジティブな傾向を示していたのが3年生時になって他の群と得点差が少なくなっていることが示された。これらの結果は、新設大学であることにプラスの影響を感じポジティブな傾向をもつ群でも、3年間で新設大学に学ぶことのネガティブな側面が集積した結果を反映しているとも推測できるが、学生の実際の状況を考えると、それ以上に3年生時に卒論や就職が意識されるようになり先輩のいない状況のマイナス面が意識されてきたための一時的な状況を反映した結果との推測することもできる。4年生時での調査の結果を待って再度考察することが課題であると

考えられた。

本研究は以上のようなこれまでの研究を継承して、開設4年目で4年生になった1期生の分析を中心に引き続き検討していく。

これまで大学生活の4年間の充実感をとりあげた研究では、大学生自身が大学生活に主体的にコミットし、充実感を考えることが重要であり、4年生時に充実感全般が高まることが示されている(坂田・佐久田・奥田・川上, 2013)。

そうした点を踏まえながら、4年生になった1期生のキャリアに関する意識や行動の発達、メンタルヘルスの問題を、新設大学であることの影響の感じ方の違いとの関連や2期生・3期生・4期生との比較によって検討したい。また1年生時、2年生時、3年生時との比較を通して経年的な変化や4年生になることによって生じてくる特徴やについて検討したい。特に高澤・播磨(2015)でみた3年生時での変化について、1期生と2期生の3年生時の各尺度の得点を比較し、進行年度がもたらす変化や新設大学であることの影響が入学年度によってどのように違ってくるかなどについて検討したい。そして、そうした点を検討することによって、就職や卒論などの課題に向かう時期における学生(とりわけ新設大学の)への支援や指導の在り方について示唆を得たい。

方法

1. 調査協力者：中国地方の新設四年制大学に所属する1期生にあたる4年生(2011年度生)259名に対して調査を行い、112名から回答を得た(回収率43.2%)。うち回答不備等による無効回答を除く107名(男48名、女101名)を分析対象とした(有効回答率95.5%)。平均年齢は21.8歳(標準偏差0.93)であった。あわせて2期生である3年生(2012年度生)と3期生である2年生(2013年度生)、4期生である1年生(2014年度生)にも同様に調査を行った。こちらは2期生が263名に調査を行い、126名から回答を得た(回収率47.9%)、うち回答不備等による無効回答を除く122名(男40名、女82名)を分析対象とし(有効回答率96.8%)、平均年齢は20.88歳(標準偏差0.58)であった。3期生は225名(回収率100%)、うち回答不備等による無効回答を除く199名(男62名、女137名)を分析対象とし(有効回答率88.4%)、平均年齢は19.85歳(標準偏差0.74)

であった。そして、4期生は239名（回収率100%）、うち回答不備等による無効回答を除く205名（男62名、女143名）を分析対象とし（有効回答率85.8%）、平均年齢は18.78歳（標準偏差0.58）であった。

また、1期生にあたる3年生（2011年度生）149名（男48名、女101名）、1期生にあたる2年生（2011年度生）217名（男84名、女133名）、そして1期生にあたる1年生（2011年度生）191名（男70名、女120名、不明1名）を分析対象とした（詳細は高澤・播磨（2015）を参照）。

2. 実施時期：2014年11月から12月で、1期生と2期生については、ゼミを通じて調査用紙を配付し、厳封の後日回収した。3期生と4期生については授業時間に調査用紙を配布し、回収した。

1期生3年生時については2013年11月から12月、1期生2年生時については2012年12月、1期生1年生時については2011年12月に高澤・播磨（2015）と同様の方法で行った。

3. 調査内容

1) 新設大学であることへの意識に関する項目

①性別、年齢、居住形態、出身地域、②大学選択理由、③新設大学であることの大学選択への影響、④新設大学であることの現在の学生生活への影響、⑤新設大学であることの今後の進路への影響を尋ねる項目、

2) キャリア探索尺度（安達, 2008）（5件法）、

キャリアに関する環境への探索行動である「環境探索因子」と、キャリアに関する自分への探索行動である「自己探索因子」の2因子構成。

3) 多次元自我同一性尺度（谷, 2001）（7件法）、

自己の不変性および時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・連続性」、自己意識の明確さの感覚である「対自的同一性」、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致している感覚である「対他的同一性」、自分と社会との適応的な結びつきの感覚である「心理社会的同一性」の4因子構成。

4) 学校への適応感尺度（大久保, 2005）（5件法）、

周囲に溶け込め、なじんでいることから生じ

る気楽さ、快適さ、居心地の良さである「居心地の良さの感覚」、課題や目的があることによる充実感である「課題・目的の存在」、周囲から信頼され、受容されている感覚である「被信頼・受容感」、周囲との関係による劣等感である「劣等感の無さ」の4因子構成。

5) 日常生活スキル尺度（大学生版）（島本・石井, 2006）（4件法）

友人たちと親密な関係を維持するスキルである「親和性」、自分が所属する集団内での活動に積極的に関わっていこうとするスキルである「リーダーシップ」、時間的展望と物事の優先順位を考慮した先見的なスキルである「計画性」、相手の気持ちへ感情移入するスキルである「感受性」、情報を秩序立てて再構成するスキルである「情報要約力」、現在のありのままの自分を肯定的にとらえるスキルである「自尊心」、困難に遭遇したときでも前向きに考えるスキルである「前向きな思考」、相手に対して好ましくない印象を与えないよう意識されたスキルである「対人マナー」の8因子構成。

各尺度の下位因子の平均点を算出し個人の得点とした。

結果

高澤・播磨（2013, 2014, 2015）と同様に、新設大学であることが大学生生活の充実感に及ぼす影響をどう感じるかによって、影響はない（以下、影響なし）、プラスの影響がある（以下、影響プラス）、マイナスの影響がある（以下、影響マイナス）の3群に分け、1期生4年生時について以下の点を整理する。すなわち、3群の割合の4年生時の現状と1年時からの経年的変化、キャリア発達、メンタルヘルス等の尺度との関連についての4年生時の現状と1年生時からの経年的変化、高澤・播磨（2015）で課題となった3年生時に見られた変化の意味を検討するための1期生と2期生の3年生時の各尺度得点の比較に加えて、入学年度別の3つの群の割合の比較、各尺度の得点の全入学年度間の比較を行う。

以上を通して、1期生の新設大学での自己形成・キャリア形成について整理し、また新設4年目における各

学年の学生生活の充実感について検討する手がかりを整理する。

1. 1期生（2011年度生）4年生時の結果

1) 大学生活の充実感への影響の感じ方

新設大学であることが大学生活の充実感に影響しているかについて、影響プラス群が23名（21%）、影響なし群が49名（46%）、影響マイナス群が35名（33%）で、半数近くが影響はないと感じていることがわかる。高澤・播磨（2013）、同（2014）、同（2015）の1年生時・2年生時・3年生時の結果と比較して経年的変化をみると、影響なし群と感じる者の割合に大きな変化は見られない（44%→41%→45%→46%）が、影響プラス群と影響マイナス群の割合に変化が見られる。すなわち影響プラス群は2年生時・3年生時に微減傾向を見せ、3年生時を底として4年生時に微増している（25%→21%→18%→21%）。一方、影響マイナス群は2年生時・3年生時に少し増え、4年生時に微減となっている（30%→38%→37%→33%）（図1）。

2年生時・3年生時に影響がマイナスに感じられやすい傾向がうかがえる。

2) 大学生活の充実感に及ぼす影響の感じ方とキャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルとの関連

新設大学であることが大学生活の充実感に及ぼす影響を独立変数として、キャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルの各尺度との関連を、高澤・播磨（2015）と同様に一元配置分散分析した結果を、表1～4で示す。なお、表1～4には経時的変化を検討するため、高澤・播磨（2015）より3年生時、同（2014）より2年生時、同（2013）より1年生時の分散分析の結果を転用し、あわせて示している。

(1) 大学生活の充実感に及ぼす影響の感じ方とキャリア探索

キャリア探索尺度との関連（表1）³では、自己探索因子、環境探索因子ともに3群間に有意差が見られず、

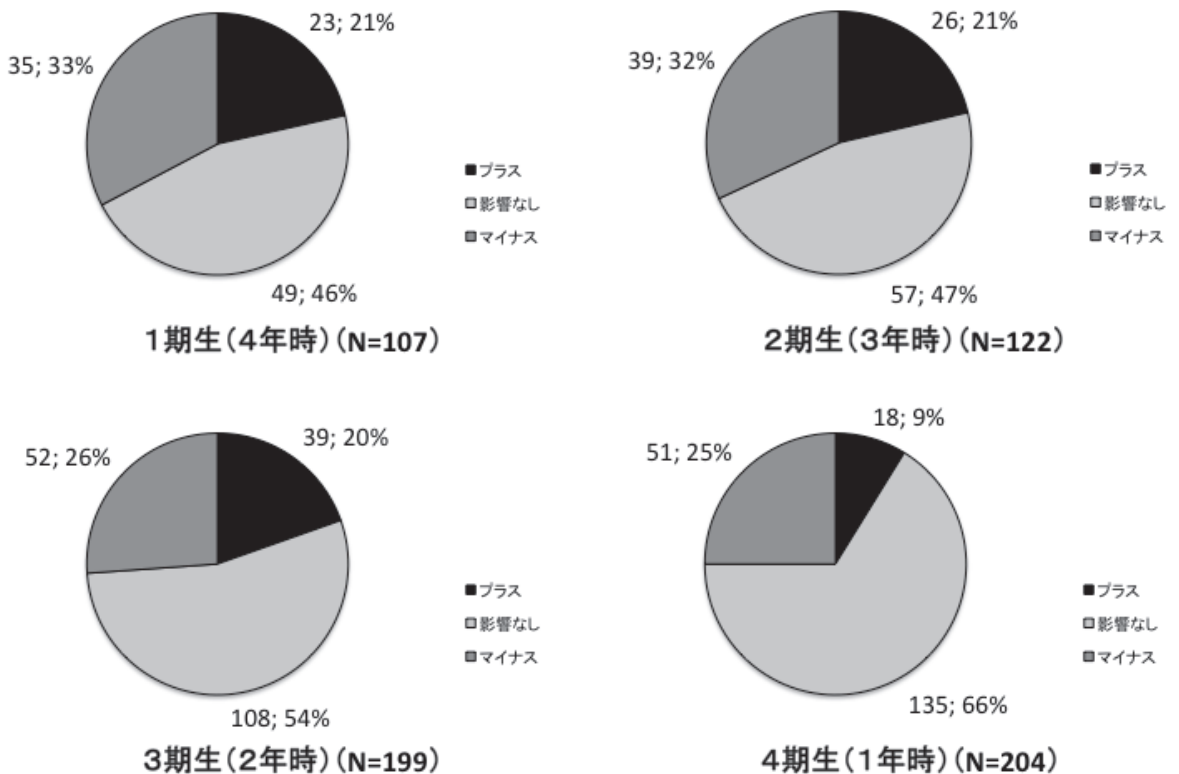


図1 新設大学であることが充実度に影響しているか

3年生時と同様に4年生時でも新設大学であることが充実感に及ぼす影響の感じ方とキャリア探索の関連はみられなかった。

経年的に見ると、自己探索因子において1年生時と2年生時に見られた群差が、就職活動が本格化する3年生時でなくなり、4年生時にも差のない状態が継続しているという結果であった。

表1 学生生活の充実度別キャリア探索尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	4年時	3年時	2年時	1年時
環境探索	3.27 (0.57)	3.03 (0.81)	3.14 (0.73)	ns	ns	ns	ns
自己探索	3.77 (0.61)	3.5 (0.87)	3.8 (0.73)	ns	ns	プラス>マイナス	マイナス>なし

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

(2) 大学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方とアイデンティティ

アイデンティティとの関連(表2)では、対自的同一性因子において影響プラス群が影響マイナス群よりも得点が有意に高かった($F(2,104) = 3.82, p < .05$)。影響マイナス群の方がアイデンティティの感覚が低いことが示唆された。自己斉一性・連続性因子と対他的同一性因子、心理社会的同一性因子においては群間に有意差が見られなかった。

経年的に見ると心理社会的同一性因子は3年生時までは一貫して影響プラス群の得点が影響マイナス群より高い傾向が見られたが、4年生時には差が見られないという結果が示された。対他的同一性因子については一貫して群間に差はみられないという結果であった。

表2 学生生活の充実度別多次元的自我同一性尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	4年時	3年時	2年時	1年時
自己斉一性・連続性	5.43 (1.13)	5.00 (1.27)	5.06 (1.41)	ns	ns	なし>マイナス	ns
対自的同一性	4.68 (1.05)	4.30 (1.10)	3.90 (1.02)	*プラス>マイナス	プラス>なし	プラス>なし	ns
対他的同一性	4.45 (0.89)	4.24 (0.84)	4.43 (0.86)	ns	ns	ns	ns
心理社会的同一性	4.65 (0.92)	4.38 (0.85)	4.37 (0.95)	ns	プラス>マイナス	プラス>なし	プラス>なし

カッコ内は標準偏差 * $p < .05$ ns: not significant

(3) 大学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方と適応感 適応感との関連(表3)では、課題・目的の存在因子において、影響プラス群の得点が影響なし群や影響

マイナス群よりも有意に高かった($F(2,104) = 5.54, p < .01$)。居心地の良さ因子、被信頼・受容感因子および劣等感の無さ因子はいずれも有意差が見られなかった。

経年的に見ると、課題・目的の存在因子は1年生時・2年生時で差が見られ、3年生時に見られなくなって、4年生時に再び現れている。また被信頼・受容感因子で1年生時・2年生時に影響プラス群と影響なし群に差が見られる(プラス>なし)が3年生時以降は消えている。居心地の良さの感覚因子と劣等感の無さ因子については、経年的にも変化がみられなかった。

表3 学生生活の充実度別適応感尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	4年時	3年時	2年時	1年時
居心地の良さの感覚	3.95 (0.63)	3.65 (0.73)	3.69 (0.55)	ns	ns	ns	ns
課題・目的の存在	4.02 (0.63)	3.48 (0.75)	3.49 (0.61)	**プラス>なし	ns	プラス>なし	プラス>なし
被信頼・受容感	3.43 (0.68)	3.02 (0.88)	3.00 (0.85)	ns	ns	プラス>なし	プラス>なし
劣等感の無さ	3.57 (0.71)	3.40 (0.65)	3.53 (0.78)	ns	ns	ns	ns

カッコ内は標準偏差 ** $p < .01$ ns: not significant

(4) 大学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方と日常生活スキル

日常生活スキルとの関連(表4)では、情報要約力因子において影響プラス群の得点が、影響マイナス群の得点より有意に高かった($F(2,104) = 3.27, p < .05$)。他の因子では有意差がみられなかった。

経年的に見ると、情報要約力因子は一貫して影響プ

表4 学生生活の充実度別日常生活スキル尺度の平均値

	プラス	影響なし	マイナス	4年時	3年時	2年時	1年時
親和性	3.01 (0.66)	2.82 (0.59)	2.86 (0.65)	ns	なし>マイナス	ns	ns
リーダーシップ	2.68 (0.75)	2.50 (0.62)	2.39 (0.67)	ns	プラス>なし	プラス>なし	ns
計画性	2.54 (0.86)	2.48 (0.63)	2.34 (0.65)	ns	プラス>マイナス	ns	ns
感受性	3.01 (0.57)	2.94 (0.61)	2.93 (0.50)	ns	ns	ns	プラス>なし
情報要約力	2.81 (0.54)	2.54 (0.51)	2.47 (0.51)	*プラス>マイナス	プラス>なし	プラス>マイナス	プラス>マイナス
自尊心	2.74 (0.56)	2.49 (0.54)	2.42 (0.56)	ns	プラス>マイナス	ns	プラス>なし
前向きな思考	2.97 (0.70)	2.63 (0.58)	2.56 (0.82)	ns	ns	プラス>マイナス	ns
対人マナー	3.39 (0.48)	3.07 (0.51)	3.15 (0.60)	ns	ns	ns	ns

カッコ内は標準偏差 * $p < .05$ ns: not significant

ラス群が他の群の得点より有意に高く、対人マナー因子については一貫して群差が見られなかった。リーダーシップ因子、計画的因子、自尊心因子といったライフイベントを進める項目では、3年生時では影響プラス群が高い得点を示していたが、4年生時では有意差が見られなくなるという結果であった。

2. 入学年度別（1期生，2期生，3期生，4期生）の大学生生活の充実感への影響の感じ方

新設大学であることが大学生生活の充実感に及ぼす影響について、新設4年目における入学年度別の感じ方の割合を示した（図2）。

入学年度による影響の受け方の違いを比較すると、影響なし群の割合は4期生で66%と最も高く、次いで3期生54%，2期生47%，1期生46%の順で、入学年度が下るほど影響なし群の割合は高くなった。

また、影響があるとする者のうち、影響プラス群は1期生と2期生が21%，3期生が20%，4期生が9%の順で、入学年度が下がるほど割合が低くなる傾

向が見られ、影響マイナス群も、1期生33%，2期生32%，3期生26%，4期生25%の順であり入学年度が下がるほどその割合は低いという結果であった。

3. 3年生時におけるキャリア探索，アイデンティティ，適応感，日常生活スキルについての1期生と2期生の得点比較

高澤・播磨（2015）では、各期生1年生時の各尺度の得点は、1期生と他の2期生、3期生の間に有意な得点差が見られなかったが、1期生3年生時（2期生2年生時、3期生1年生時）でみると1期生（3年生）が複数の尺度の得点で他の期生（1・2年生）より有意に高いという変化がみられた。この変化について、1期生の特殊性が反映されているためなのか、学年進行によってもたらされた変化や就職・卒論が具体的に意識されてきたことの影響によるものなのかを、2期生も3年生時に1期生3年生時と同じような得点を示すかどうかによって検討するために、1期生と2期生の3年生時における得点を比較する。

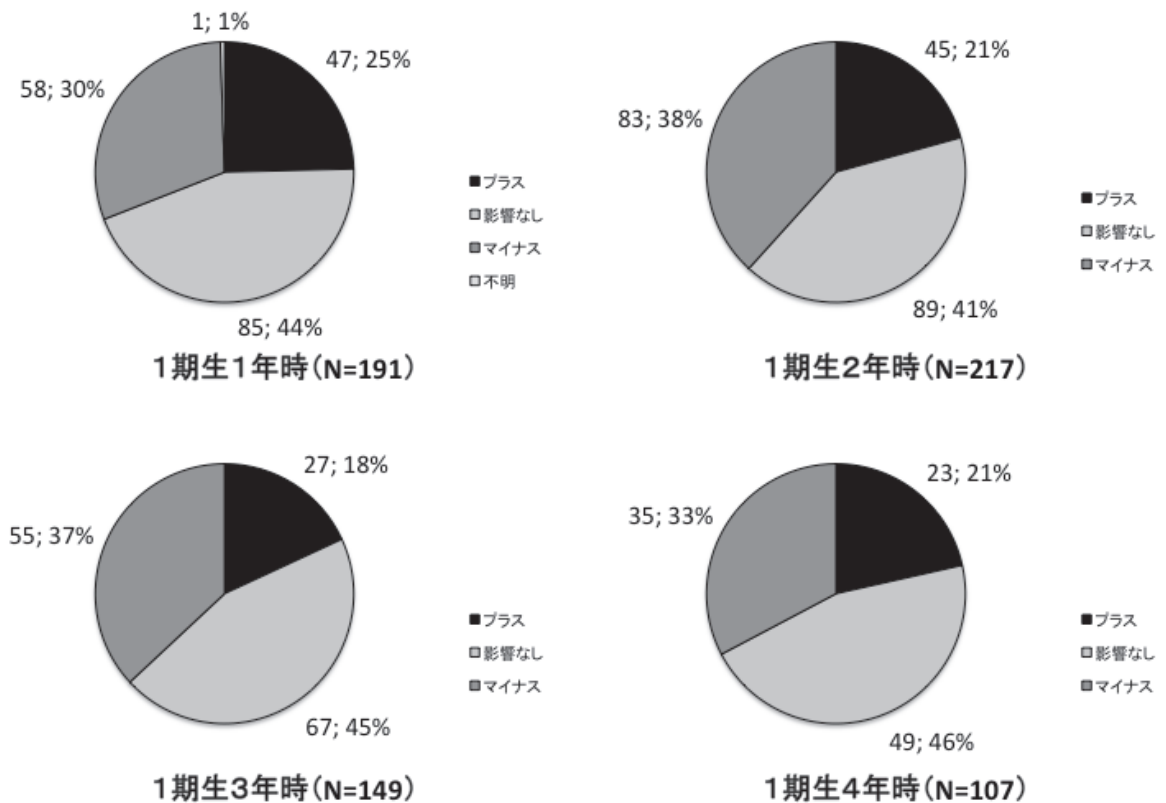


図2 新設4年目における学年別新設大学であることが大学生生活の充実度に影響があるか

1) 入学年度とキャリア探索

キャリア探索では、環境探索因子において1期生が2期生よりも得点が有意に高いことが示された ($t(269) = 3.08, p < .01$)。一方、自己探索因子では1期生と2期生の間に有意差は見られなかった(表5)。

表5 入学年度別3年時キャリア探索尺度の平均値

	1期生	2期生	
環境探索	3.34(0.68)	3.08(0.67)	**
自己探索	3.59(0.74)	3.49(0.76)	ns

カッコ内は標準偏差 ** $p < .01$ ns: not significant

2) 入学年度とアイデンティティ

アイデンティティでは、自己斉一性・連続性因子、対自的同一性因子、対他的同一性因子、心理社会的同一性因子いずれにおいても1期生と2期生の間に有意差は見られなかった(表6)。

表6 入学年度別3年時多次元の自我同一性尺度の平均値

	1期生	2期生	
自己斉一性・連続性	4.87(1.24)	4.75(1.30)	ns
対自的同一性	4.03(1.11)	3.99(1.11)	ns
対他的同一性	4.29(1.09)	4.17(0.85)	ns
心理社会的同一性	4.32(0.97)	4.25(1.01)	ns

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

3) 入学年度と適応感

適応感においては、居心地の良さの感覚因子、課題・目的の存在因子、被信頼・受容感因子、劣等感の無さ因子いずれにおいても1期生と2期生の間に有意差は見られなかった(表7)。

表7 入学年度別3年時適応感尺度の平均値

	1期生	2期生	
居心地の良さの感覚	3.69(0.63)	3.70(0.70)	ns
課題・目的の存在	3.65(0.71)	3.60(0.75)	ns
被信頼・受容感	3.06(0.76)	3.08(0.82)	ns
劣等感の無さ	3.25(0.72)	3.31(0.78)	ns

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

4) 入学年度と日常生活スキル

日常生活スキルでは、親和性因子、リーダーシップ因子、計画性因子、感受性因子、情報要約力因子、自尊心因子、前向きな思考因子、対人マナー因子いずれにおいても1期生と2期生の間に有意差は見られなかった(表8)。

表8 入学年度別3年時日常生活スキル尺度の平均値

	1期生	2期生	
和	2.85(0.65)	2.86(0.55)	ns
リーダーシップ	2.36(0.68)	2.46(0.62)	ns
計画性	2.45(0.71)	2.44(0.65)	ns
感受性	2.92(0.54)	2.92(0.52)	ns
情報要約力	2.51(0.62)	2.48(0.54)	ns
自尊心	2.47(0.64)	2.44(0.62)	ns
前向きな思考	2.55(0.70)	2.56(0.64)	ns
対人マナー	3.10(0.58)	3.04(0.50)	ns

カッコ内は標準偏差 ns: not significant

4. 入学年度別(1期生, 2期生, 3期生, 4期生)のキャリア探索, アイデンティティ, 適応感, 日常生活スキルの各尺度得点の比較

1) 入学年度とキャリア探索

キャリア探索では、環境探索因子において1期生(4年生時)と2期生(3年生時)が4期生(1年生時)よりも得点が有意に高いことが示された ($F(3,629) = 7.14, p < .001$)。また、自己探索因子も1期生と2期生が4期生より得点が有意に高いことが示された ($F(3,629) = 7.86, p < .001$) (表9)。

表9 入学年度別新設4年目キャリア探索尺度の平均値

	1期生	2期生	3期生	4期生	
環境探索	3.12(0.74)	3.08(0.67)	2.95(0.66)	2.79(0.74)	***1,2>4
自己探索	3.66(0.78)	3.49(0.76)	3.42(0.85)	3.22(0.77)	***1,2>4

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$

2) 入学年度とアイデンティティ

アイデンティティでは、自己斉一性・連続性因子 ($F(3,629) = 6.50, p < .001$) と心理社会的同一性因子 ($F(3,629) = 9.47, p < .001$) において、1期生が3期生(2年生時)及び4期生よりも得点が有意に高いことが示された。また対自的同一性因子 ($F(3,629) = 4.39, p < .01$) と対他的同一性因子 ($F(3,629) = 4.00, p < .01$) では1期生が3期生よりも得点が有意に高いことが示された(表10)。

表10 入学年度別新設4年目多次元の自我同一性尺度の平均値

	1期生	2期生	3期生	4期生	
自己斉一性・連続性	5.11(1.29)	4.75(1.30)	4.49(1.21)	4.54(1.28)	***1>3,4
対自的同一性	4.25(1.09)	3.99(1.12)	3.78(1.06)	4.03(1.14)	**1>3
対他的同一性	4.35(0.85)	4.17(0.85)	4.01(0.78)	4.09(0.89)	**1>3
心理社会的同一性	4.44(0.90)	4.25(1.01)	3.93(0.81)	4.00(0.86)	***1>3,4

カッコ内は標準偏差 *** $p < .001$ ** $p < .01$

3) 入学年度と適応感

適応感においては、被信頼・受容感因子 ($F(3,629)$)

=3.61, $p<.05$) において1期生が3期生よりも得点が有意に高かった。また, 劣等感の無さ因子 ($F(3,629)=10.28, p<.01$) では1期生, 2期生, 4期生が3期生よりも, また, 1期生と2期生が4期生よりもそれぞれ得点が有意に高かった (表11)。

居心地の良さ因子および課題・目的の存在因子では有意差が見られなかった。

表11 入学年度別新設3年目適応感尺度の平均値

	1期生	2期生	3期生	4期生	
居心地の良さ	3.60(0.71)	3.60(0.75)	3.48(0.67)	3.51(0.76)	ns
課題・目的の存在	3.60(0.71)	3.60(0.75)	3.48(0.67)	3.51(0.76)	ns
被信頼・受容感	3.10(0.84)	3.08(0.82)	2.84(0.76)	2.93(0.78)	* 1>3
劣等感の無さ	3.48(0.90)	3.31(0.78)	3.03(0.72)	3.23(0.67)	***12>3124

カッコ内は標準偏差 *** $p<.001$ * $p<.05$ nsnot significant

4) 入学年度と日常生活スキル

日常生活スキルでは, リーダーシップ因子 ($F(3,629)=4.36, p<.01$) と情報要約力因子 ($F(3,629)=4.36, p<.01$) において1期生が3期生及び4期生よりも有意に得点が高かった。また, 自尊心因子 ($F(3,629)=3.75, p<.05$) では1期生の方が3期生よりも有意に得点が高いことが示された (表12)。

親和性因子, 計画性因子, 感受性因子, 前向き思考因子, 対人マナー因子においては有意差が見られなかった。

表12 入学年度別新設4年目日常生活スキル尺度の平均値

	1期生	2期生	3期生	4期生	
親和性	2.88(0.63)	2.86(0.55)	2.83(0.60)	2.78(0.70)	ns
リーダーシップ	2.50(0.68)	2.46(0.62)	2.29(0.62)	2.30(0.59)	** 1>3,4
計画性	2.45(0.69)	2.44(0.65)	2.28(0.66)	2.41(0.63)	ns
感受性	2.95(0.56)	2.92(0.52)	2.83(0.65)	2.90(0.61)	ns
情報要約力	2.58(0.53)	2.48(0.54)	2.36(0.58)	2.39(0.53)	** 1>3,4
自尊心	2.52(0.56)	2.44(0.62)	2.28(0.65)	2.36(0.64)	* 1>3
前向きな思考	2.68(0.71)	2.56(0.64)	2.52(0.63)	2.52(0.67)	ns
対人マナー	3.17(0.54)	3.04(0.50)	3.02(0.61)	3.10(0.59)	ns

カッコ内は標準偏差 ** $p<.01$ * $p<.05$ nsnot significant

考察

本研究は新設大学であることがもつ学生に対する影響を, 大学生活への意識およびメンタルヘルスの問題と, キャリアに関する意識や行動の発達との関連において検討するため, 大学新設初年度入学生 (1期生) を対象に行なってきた経年的調査研究の4年生時における調査研究であり, これまで同様新設大学であることへの意識に関する質問項目, キャリア探索尺度, 多次元自我同一性尺度, 青年用適応感尺度, 日常生活ス

キル尺度で調査内容を構成し, 他の期生 (2期生3年生時, 3期生2年生時, 4期生1年生時) についても同時に調査を実施している。

考察では, これまでの研究同様, 新設大学であることが学生生活の充実感に及ぼす影響の感じ方の違いによって3群 (影響プラス群, 影響なし群, 影響マイナス群) に分け, 群間での得点差が明らかな尺度の構成因子に注目して分析考察をすすめるが, 本研究が1期生4年生時 (最終学年時) の調査であるため, 新設大学であることの影響についての1期生と他期生の感じ方の違い, 新設大学での最終学年の現状を他期生の現状との比較および1年生時からの経年的変化を通して検討し, 新設大学での学年進行や各学年でのイベントによる自己形成・キャリア形成について考察する。

1. 1期生における新設大学であることが学生生活の充実感にもたらす影響の感じ方とその経年的変化

1) 学生生活の充実感への影響の感じ方の経年的変化
1期生の新設大学であることが学生生活の充実感に及ぼす影響についての感じ方は, 1年生時においては, 影響なし群と影響プラス群を合わせると約70%, 影響マイナス群は30%で, 新設大学に入学したことをマイナスの事態と感じている学生は多くないことがわかる。経年的に見ていくと, 2年生時と3年生時にマイナスの影響を感じる者が少し増えている (2年生時38%, 3年生時37%) が, 4年生時ではまた少し減少 (33%) している。2・3年生時にマイナスの影響を感じやすくなっている要因はさまざまに推測できるが, そのひとつに, 就職活動の問題と卒業論文の取組の問題が考えられる。本調査は毎年11月末～12月初めに行なわれているが, 2年生の冬以降は就職の問題が次第に意識されるようになってくる時期であり, 具体的は進路指導も始まってくる時期である。こうしたイベント中で先輩がいない新設大学の状況がマイナスとして意識されるようになっていくことが, この結果に反映されていることが考えられる。さらに3年生時では卒論作成において先輩というモデルがないことで改めて心細く感じることも少なくないと推測される。4年生時で2・3年生時よりマイナスと感じる割合が減っているのは, 就職活動がほぼ終了した卒論も仕上げの時期に入り, 進路や学業に情報源やモデルとしての先輩の不在を不安に思う時期が過ぎたためではな

いかと推測できる。また、1期生の就職活動においては、新設大学で学んでいることがむしろアピールポイントとして有利に働くという経験もあったかもしれない。そうしたことも結果に反映しているかもしれない。

4年間全体を通すと、影響なし群が40～50%あったものの、マイナスに影響していると感じている者は30%を下らない。先輩がいないという新設大学の状況はモデル不在の不安につながっていると考えられ、学生生活における先輩というモデルの存在の重要性が示されたといえる。

2) 学生生活の充実感にもたらす影響の感じ方とキャリア探索尺度、多次元自我同一性尺度、青年用適応感尺度、日常生活スキル尺度との関連

新設大学であることの影響の感じ方の違いによる3群間で、有意な得点差が見られたのは、4年生時では「多次元的自我同一性尺度」の対自的同一性因子における影響プラス群と影響マイナス群の間の差（影響プラス>影響マイナス）（表2）、「学校への適応感尺度」の課題・目的の存在因子における影響プラス群と影響なし群、影響マイナス群の差（影響プラス>影響なし、影響マイナス）（表3）、「日常生活スキル尺度」の情報要約力因子における影響プラス群と影響マイナス群の差（影響プラス>影響マイナス）（表4）の3つのみであった。

経年的に見ると影響プラス群は、対自的同一性因子において2年生時に他群より高い得点を示し、また心理社会的同一性因子においては1年生時から一貫して影響マイナス群より有意に高い得点を示していたが、4年生時には有意差がなくなっている（表2）。

「多次元的自我同一性尺度」の対自的同一性因子は現時点における自己探索の方向が定まっていることを示す因子であり、また4年生時で得点差がなくなった「心理社会的同一性因子」は、社会における自分の位置づけが確立していることを示す因子である。

したがって、影響プラス群は他群より今の自分や将来について安定して考え、今後のあり方についても社会的な現実を踏まえて探索的に考えていくことができる群で、4年生にかけての就職活動等の期間にはその特色が大いに発揮され強化されたと推測できる。その一方で、心理社会的同一性因子が4年生で有意差が見られなくなっているのは、影響の感じ方の群の違いに

かかわらず、進路が定まった時点で、自分の社会における位置づけがある程度落ち着いてきたことが反映されていると考えられる。

「適応感尺度」では、影響プラス群が課題・目的の存在因子で他の群より高い得点を示している。経年的にみると、1・2年生時に課題・目的の存在因子と被信頼・受容感因子において他群との差が見られた（それぞれ、影響プラス>影響なし・影響マイナス、影響プラス>影響なし）が、3年生時には差が見られなくなり、4年生時になって再度差があらわれたという経過である（表3）。3年生時で差が消えていたのは、就職活動が具体化していく中で、どの群であっても進路に向けて何をすべきかの意識が高まっていたことを反映したのではないかと推測され、調査時期である4年生の11月末から12月初めに進路が定まっていた段階で、各群のもつ特性が再度顕著になってきたためにでてきた群差とも推測される。このことは、逆にいえば、就職活動など具体的な目的と必要な活動が明確な事態に直面した場合には、群の差異にかかわらずそれに向かっていく力を発揮することができるということを示唆しているかもしれない。

「日常生活スキル尺度」では、3年生時までは、対人マナー因子を除く全ての因子において、影響プラス群の得点が高い形での何らかの差が認められたが、4年生時には情報要約力因子に差が認められるのみ（影響プラス>影響マイナス）になった（表4）。日常生活のスキルの多くは4年間の学生生活の中で培われ、群間に差がなくなったと考えられる。その中で情報要約因子には差が残っていることについて検討すると、影響プラス群は、そもそも新設大学であることが学生生活の充実にプラスに影響していると感じる群であり、先輩というモデルがいない状況を不安と感じずむしろプラスの影響と感じられる群といえる。それは自分をとりまく情報を要約でき必要な情報を取り出す能力が高いので、先輩という行動モデルを必ずしも必要としないということを意味するとも考えられる。その意味では情報要約力因子は、影響プラス群にとって本質的な特徴の1つと考えることができる。就職活動のなかで大いに発揮されさらに強化されたことが推測される。情報要約力因子のみに差が残っているのはそうしたことが反映されているからではないかと推測される。

最後に、影響マイナス群の特徴を経年的にみると、「日常生活スキル尺度」の情報要約力因子において一貫して他群より得点が低く、また「多次元的自我同一性尺度」の対自的同一性因子においても得点低い。つまり自分をとりまく情報を要約できる因子と現時点における自己探索の方向が定まっていることを示す因子とで得点が低いということであり、こうした特徴はモデルとなる先輩や蓄積情報がない状況での就職活動や卒論作成においては、他群以上に不安や自信のなさを感じやすいであろうことが推測される。進路や学生生活における積極的で適切な支援が必要になると思われる。それは例えば、高澤・播磨(2015)が提言したように、学年が進むとともに就職活動やゼミ活動、卒業研究といった主体的な取り組みが必要な場面が多くなっていくことを考慮して、影響マイナス群に対しては、上級学年になることによって自らがモデルとなることへの自覚を刺激するとともに、卒業・就職に向けて実現可能な計画をたて、自信をもちながら実行していけるためのより具体的で見通しが持てる丁寧な支援などが望まれるといえよう。

2. 3年生時におけるキャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルについての1期生と2期生の得点比較

高澤・播磨(2015)で明らかになったように、1期生の3年生時に見られた変化、すなわち新設3年目における各期生の1年生時の尺度得点の比較では、入学年度による差があまり見られなかったのが、1期生3年生時に2期生2年生・3期生1年時の得点の比較では1期生の得点が複数の尺度において他の期生より有意に高くなるという変化があった。変化があったのは「キャリア探索尺度」の環境探索因子と自己探索因子、「多次元自我同一性尺度」の心理社会的同一性因子、「適応感尺度」の課題・目的的存在因子と被信頼・受容感因子、「日常生活スキル尺度」の自尊心因子である。これらの変化は学年進行によってもたらされた変化や就職・卒論が具体的に意識されてきたことの影響によるものなのか、1期生に固有の特徴が反映されたものなのかを検討するため、1期生と2期生の3年生時の各尺度の得点を比較した(表5～表8)。

結果は、「キャリア探索尺度」の環境探索因子において1期生の方が2期生よりも有意に得点が高い(表5)

という以外は、1期生と2期生の得点に差はなかった。つまり3年生時では、2期生も1期生と同様の得点を示しているということになり、高澤・播磨(2015)に見た1期生3年生時の変化は、1期生に固有の特徴というより、就職活動や卒論作成が現実的になってくる3年生という学年進行情期に起こる変化の反映と推測できるようである。得点差が出た因子は就職活動がもたらした変化として理解できる内容だといえる。

これまでに見たように3年生になると群間での得点差がなくなったりすることなど、3年生時には学生の成長に1つの節目が想定できるのかもしれない。

1期生と2期生の3年生時に差のあった「キャリア探索尺度」の環境探索因子は、積極的な探索行動にかかわる因子であり、就職活動において圧倒的に情報量が少ない1期生の得点が高く出たのは必然といえるかもしれない。

3. 新設4年目の大学における入学年度別の学生の現状の比較

1) 新設大学であることの学生生活の充実感への影響の感じ方の入学年度別の比較

図2に見られるとおり、1期生では影響なしと感じる者の割合は46%であるが、入学した年度が下がるほど、影響なし群が増え、4期生では6割を超えている。高澤・播磨(2015)の報告でも述べたが、図2に示したように1期生以外は先輩がいる状態なのであり、2期生ではまだ1学年上に先輩がいるだけの1期生とあまり大きくは変わらない状態であるといえるが、3期生や4期生になると先輩というモデルを見て大学生活を送ることができるようになり、新設大学であるということあまり意識しないようになると考えられる。ただしそれでも3期生と4期生の25%程度がマイナスの影響を感じているのであり、今後は安心して誇りを持つ大学の伝統をつくっていくことが課題になっていくといえよう。

2) 「キャリア探索尺度」、「多次元的自我同一性尺度」、「学校への適応感尺度」、「日常生活スキル尺度」の得点の入学年度別比較

新設4年目における1期生、2期生、3期生、4期生の間では、キャリア探索、アイデンティティ、適応感、日常生活スキルの全ての尺度で学年間に得点差が

みられた。

「キャリア探索尺度」の環境探索因子と自己探索因子では1期生と2期生の得点が4期生の得点より高く(表9),「多次元的同一性尺度」の対他同一性因子及び心理社会的因子では1期生の得点が3期生あるいは3期生・4期生の得点よりも高かった(表10)。「学校への適応感尺度」の被信頼・受容感因子と劣等感の無さ因子(表11),「日常生活スキル尺度」(表12)のリーダーシップ因子,情報要約力因子及び自尊心因子での差も含め,得点差は1期生と3・4期生の間でみられ,1期生と2期生の間には差はみられなかった。このことから,これまでも注目してきたように,3年生後期頃に学生の成長の1つの節目が想定できると考えられるかもしれない。1期生・2期生はモデルがない状況の中で就職や卒論作成等の学業に向き合う大学生活を通して,キャリア探索やアイデンティティ,適応感,日常生活スキルを養ってきたことが推測される結果と言える。

まとめと今後の課題

新設大学であることが学生生活の充実に及ぼす影響について検討するために1期生に注目し,キャリア探索,アイデンティティ,適応感,日常生活スキルの側面から,1年生時より縦断的に調査し,4年生時点での横断的,縦断的に考察を試みた。すなわち4年生になった1期生の現状と学年進行による変化を,他の学年との比較,1年生時からの経年的な変化によって検討し,併せて新設4年目における入学年度別の学生(1期生=4年生,2期生=3年生,3期生=2年生,4期生=1年生)の特徴を検討した。その結果,就職活動や卒論作成に向き合い始める3年生時になるとモデルになる先輩の不在がマイナス面として意識されてくること,特にキャリア探索において先輩の存在の重要が意識されること,しかし4年生になると収まってくること,3年生の後期頃に学生の成長のひとつの節目が想定できるかもしれないことなどが示唆された。また,1つ上の先輩しかいない2期生にはさまざまな面で1期生と似た傾向があるといえるが,すでに先輩が在籍する状態で入学する3期生・4期生では新設大学であるという意識が薄らいでいく一方で,新設大学であることは学生生活の充実にマイナスに影響すると感じる学生が25%程度存在している。完成年度を迎え,

20%を超える学生が新設大学であることは学生生活の充実にプラスの影響をもつと感じ,先輩のいない状況下で自ら行動していた1期生が卒業した後は,新しい大学であることの良さを生かしつつ,安心して誇りを持つての伝統作りに向けた学生支援が必要になってくると思われる。

今後はこれらの知見をどのようにこれからの学生生活支援やキャリア形成支援に活かしていくのかを検討することが課題である。例えば,田澤・須藤(2008)では,OB・OGや上級生がキャリア支援行事を企画し,それを運営していくことで自分たちや後輩たちのキャリア形成につなげているといった事例が報告されている。こうした学年を超えたキャリア支援への活用も検討していきたい。そして,先輩がいない学生生活を送った若者たちが,社会に出ることによって新設大学で学ぶことの影響や成長についての卒業生自身の実感の追跡や,今後の学生生活支援における具体的な在り方を検討していくことが課題である。

3 表1～表4の3年時は高澤・播磨(2014),2年時は高澤・播磨(2013),1年時は高澤・播磨(2012)を参照。

引用文献

- 安達智子(2008) 女子学生のキャリア意識-就業動機,キャリア探索との関連- 心理学研究, 79(1), pp.27-34
- 大久保智生(2005) 青年の学校への適応感とその規定要因-青年用適応感尺度の作成と学校別の検討- 教育心理学研究, 53, pp.307-319
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩(2013) 複数コホートの大学1回生～4回生の縦断データから見た大学生生活充実感の学年変化 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 3, pp.29-37
- 島本好平・石井源信(2006) 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, pp.211-221
- 高澤健司・播磨俊子(2013) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連(1) 福山市立大学教育学部研究紀要, 1, pp.31-35
- 高澤健司・播磨俊子(2014) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連(2) 福山市立大学教育学部研究紀要, 2, pp.51-56
- 高澤健司・播磨俊子(2015) 新設四年制大学における学生生活の充実感とキャリア発達およびメンタルヘルスとの関連(3) 福山市立大学教育学部研究紀要, 3, pp.47-56

谷冬彦 (2001) 青年期における同一性感覚の構造 - 多次元
自我同一性尺度 (MEIS) の作成 - 教育心理学研究, 49,
pp.265-273

田澤実・須藤智 (2008) OB・OG, 大学4年生のキャリア講
話による低学年の大学生を対象にしたキャリア支援?卒業生
による自主企画を例にして - 生涯学習とキャリアデザイ
ン, 5, pp.75-86